

# 合言葉は「学生の成長」 これからの 高大接続

2023年、入試の結果はどうだっただろうか。18歳人口減少の折、国公立問わず、数、質ともに十分に満足な結果が得られた大学はそう多くはないだろう。学生が集まらない状況は、自学の社会における存在意義を、あらためて問いかけていると言っても過言ではない。それは大学に学生を送り出す高校もだ。今こそ高校と連携し、共に「生徒・学生の成長」に取り組むことが、この先の自学の存在価値、そして、未来をつくることにつながるのではないだろうか。

## 生徒・学生視点で 高大接続を見直す

18歳人口減が続く中、定員未充足はもとより、数は確保したとしても、自学に合った学生が獲得しにくくなった大学も少なくないだろう。2022年の出生数は70万人台。中教審が出した\*「グランドデザイン答申」のターゲットイヤーである2040年には、計算上、大学数は現在の3分の2から2分の1で間に合うという。

まさに大学の存亡をかけて学生募集に取り組んでいる大学も多いだろうが、もはや、入試広報の工夫だけで、どうにかなるような状況ではない。「中長期的に定員を充足させるためには、社会からの評価が必要。社会は人材育成力で大学を評価する」(文部科学省・平野大学入試室長)。つまり、このような時期だからこそ、自学が掲げたDPを達成するため、入り口から出口までの一体的なデザイン、すなわち入試制度とその前後の教育のしくみの設計が、将来の自学の存在価値を決め、社会の信頼を得る礎になると確信する。

社会からの信頼を得る第一歩として、本特集では「学生の成長」を合言葉にした高大接続を提案したい。探究学習、教育協定、高校訪問、入試、入学前教育の5つのテーマについて、学生を主体としたあり方を考えていく。高校と大学が協働して人材育成を行うことよって、高校とのつながりを強め、自学に合う生徒を推薦してもらう好循環をつくっていく。その第一歩になれば幸いである。

\*「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」(2018年)

## 生徒・学生視点での「これからの高大接続」のあり方

	これまで	これから
<b>探究学習</b> P.14~	高校側が指導力・リソース不足の場合、受け身でのやらされ探究になりがち <b>生徒・学生</b> 探究学習の経験が主体的な進路選択につながらないことも	大学も探究学習に関わることで、高校の探究学習の質を向上させる <b>生徒・学生</b> 自ら学び続ける姿勢が身に付き、主体的に進路を考えられるようになる
<b>教育協定</b> P.24~	協定を結ぶ高校数を増やすことを優先し、各校との教育連携が形式的に <b>生徒・学生</b> 指定校推薦との差が不明瞭。明確な志望理由のない安易な受験、入学	お互い教育のビジョンが合致する高校と協定を結び、高大で生徒を育てる <b>生徒・学生</b> 協定先の大学に進学する場合、その大学での学びのレディネスができている
<b>高校訪問</b> P.26~	訪問校数重視。入試や改組等の「変更点」、実績中心の一方的な情報提供 <b>生徒・学生</b> 高校教員が大学の特色を把握できなかった場合、勧められる大学は偏差値軸に偏りがち	自学向きの生徒が多い高校を戦略的に訪問し、生徒が主語の未来を語り合う <b>生徒・学生</b> 高校教員から自分に合った大学を勧められる
<b>入試</b> P.6~	APやDPとの整合性より目先の数を集めることを重視した入試制度 <b>生徒・学生</b> 入学後ミスマッチに気づき、学ぶ意欲が減退し、中退も	教学マネジメントの出発点として、DP・APと整合性がある入試制度 <b>生徒・学生</b> 自分に合った大学への進学と大学教育での成長が実感できる
<b>入学前教育</b> P.28~	基礎学力 <sup>ほとん</sup> の補填が目的の課題 <b>生徒・学生</b> 高校と大学の学びの違いに気づかず、大学教育への期待も湧きにくい	基礎学力+入学後の学びへの動機付け <b>生徒・学生</b> 入学前に大学で学ぶための準備ができ、入学後の学びへの移行がスムーズに

文／編集部

